

目次

はじめに 井原泰雄

第1章 考古学理論との対峙 中尾 央

——プロセス考古学とポストプロセス考古学をなぜ議論するのか

第2章 「対談」 ムカシのミライ…プロセス考古学×ポストプロセス考古学 阿子島 香・溝口孝司・中尾 央

司会…菅野智則

第3章 プロセス学派とポストプロセス学派の相克をめぐる人類学的布置 大西秀之

第4章 歴史科学としての現代考古学の成立 三中信宏

——研究者ネットワークと周辺分野との関係について

| | | | |
|------|--|------|-----|
| 第5章 | 埋蔵文化財にかかわる日々の業務の中で | 菅野智則 | 169 |
| 第6章 | プロセス考古学の現在から日本考古学の未来へ | 阿子島香 | 177 |
| 第7章 | ポストプロセス考古学的フェイズにおける社会考古学 | 溝口孝司 | 197 |
| | ——リコメント、あるいは同時代的状況の中で 適切に体系的に「温故知新」を行うために | | |
| あとがき | 田村光平・有松唯 | | |
| 索引 | | | |

第1章 考古学理論との対峙

——プロセス考古学とポストプロセス考古学をなぜ議論するのか

中尾 央

1 導入

プロセス考古学、そしてプロセス考古学に対する反動としてのポストプロセス考古学そのものの内容については、本書の中核をなす対談、そしてそれぞれの旗手たるルイス・R・ビンフォードとイアン・ホダーの文化的直系子孫である阿子島香・溝口孝司両氏によるさまざまな解説があり（*e.g.* 阿子島 1983: 1986; 溝口 1991, 1997a, 1997b）、それ以外にも優れた解説がいくつか挙げられる（*e.g.* 後藤 1983, 1984; 佐々木 1990）。さらに日本語以外の文献であれば山のようにそうした解説が存在し、また哲学的考察もいくつか散見される（Johnson 2006; O'Brien *et al.* 2005; Salmon 1982; Trigger 2006 [2015]; Wiley & Sabloff 1993 [1979]; Wiley 2002）。したがって、本章でもわざわざその内容を解説したり、また哲学的分析を繰り返したりする必要はないだろう。もちろんまったくの説明なしに議論を進めるのは不親切でしかないので、それぞれについて簡単な概説を行おう。

本章の目的は、本書の中核をなす対談の背景、そしてその対談の意図を明確にすることである。その

ため、本章ではプロセス考古学、そしてポストプロセス考古学という二つの理論的アプローチが特に日本においてどのように受け止められ、またそのように受け止められてきたのはなぜかを考察する。具体的には、第2節でプロセス考古学、第3節でポストプロセス考古学のそれぞれに対し、日本考古学がどのようにかかわってきたかを概観し、第4節において対談の目的、すなわちなぜ今日本で、プロセス考古学とポストプロセス考古学の対談を行う必要があるのかについて、確認する。

2 プロセス考古学と日本考古学

プロセス考古学は、冒頭でも触れたようにルイス・R・ビンフォードを中心に展開され、文化の動的な変化プロセスをある種の科学的手法によって説明しようとする、考古学上の理論的・実践的アプローチである¹⁾。このプロセス考古学が登場する以前は、考古遺物のパターンからの文化集団の同定や伝播過程の解明など、文化史の記述が主な目的になっており、その文化集団の形成過程や伝播過程についての説明はそれほど重視されていなかった。ビンフォードが「人類学としての考古学」(1962)で一つの主眼においたのが、この「説明」である。

また、文化そのものの見方も従来とは異なっていると言われる。プロセス考古学の登場以前、特に考古学においては、文化が外的環境に対する適応である、といった機能主義の見方はそれほど広まっていなかった。プロセス考古学においては、さまざまな文化が一つのシステムとして機能しながら、外的環境に対する適応として機能的な意義を持っていると考えられている(特にBinford 1965)。

このプロセス考古学は「科学的」なアプローチとみなされることが多く(e.g. 穴沢 1985; 都出 1986)、ピ

ンフォード自身、カール・ヘンペルという科学哲学者の議論に影響を受け、考古学における科学的な説明、特に仮説演繹法に基づく説明を目指していた (Binford 1962, 1968; Hempel 1965)。すなわち、考古学的現象の説明に対して何らかの普遍的な命題を立て、その命題からテスト可能な仮説を演繹する。次に、演繹された仮説を現実の事象に照らし合わせてテストし（このテストの際に統計的手法や後述する民族学的手法が採用される）、仮説が正しいかどうか確かめられる。仮説が正しいことがわかれば、その背後にある普遍的な命題が正しい可能性も高くなる。ビンフォードはこうした一連の手続きを、考古学においても保証しようとしていたのである（特に Binford 1968, pp. 16-20 を参照）。

しかし、もちろんのことながら、人間の文化変化プロセス全般に関して普遍的命題を求めようとするのはかなり困難であり、ビンフォードのアイディアはさまざまなかたちで批判されてきた (e.g. Salmon 1982; Wylie 2002)。ビンフォードもこうした批判を受け、高次の普遍的説明ではなく、各種の（静的な）考古学的記録が、過去の（動的な）人間行動からどのように形成されるのかについての、ミドルレンジ・セオリー（中範囲理論）を探索することへと焦点を移していった (阿子島 1983, pp. 180-181)。

このプロセス考古学が登場し、アメリカで大きな影響力を持ったのは一九六〇年代半ばから一九七〇年代のことである。阿子島 (阿子島 1983, p. 17; Thomas 1979, pp. 56) がその影響力を的確に示す、次のような引用を行っている。「君はニューアーケオロジスト（＝プロセス考古学者）か、オールドアーケオロジストか、でないなら何なんだ、決心をつけろ！」。このような表現が考古学の概説書に見られる程度には、プロセス考古学は強い影響力を誇っていたのである。

これだけでなく、アメリカでプロセス考古学がどれだけ広がったかは、各種文献を見れば明らかであ

る。M・J・オブライエンら (O'Brien et al. 2005, p. 52) は一九九四年に行われたあるアンケートの結果を示しているが、このアンケートは自身がどの学派に属するかをアメリカの考古学者に問うたものである。その結果、二〇〇三〇代の考古学者は、四〇%近くが自身をプロセス学派と回答している。その他の学派としては文化史 (Culture History)、文化生態学 (Culture Ecology)、ポストプロセス学派 (Postprocessual) が設定され、いずれもプロセス学派の半分程度、二〇%前後の研究者が自身をそれぞれ別のカテゴリーに分類する。また、B・G・トリガー (Trigger 2006, p. 407 邦訳 p. 294) による次の文章も興味深い。「歴史的問題として問うべきなのは、アメリカの若き考古学者に対し、ビンフォードのアプローチはどのようにしてここまで力強くアピールしたのか³⁾であるという。このように、プロセス考古学がアメリカである種支配的な立場にあったことは、もはや否定しようがない。

しかし、日本ではまったく違った。たとえば、阿子島が日本でプロセス考古学に触れ始めたのは彼がビンフォードの元に留学した後の一九八〇年代前半以降だが、それよりも前に、プロセス考古学に正面から向き合った研究はほぼ皆無と言ってよい状態が続いていた。

このような中、プロセス考古学を正面から取り上げた初めての論考は、安扇 (1990) が指摘するように、おそらく藤本 (1976) である。藤本は旧石器時代の石器研究に関する方法的考察において、批判的な検討を加味しつつも、一定の理解を示しながらビンフォードが展開していたアプローチ (特にムステイエ文化に属する石器群の因子分析) を紹介している。これは後年の藤本 (1985) でも同様である (たとえば pp. 25-28)。

しかし、藤本や阿子島の紹介を除けば、そして一九六〇年代後半から八〇年代前半までを振り返って

みれば、日本考古学はプロセス考古学を真正面から顧みることはほとんどなかったと言つてよいだろう。たとえば、日本考古学の代表的雑誌である『考古学雑誌』や『考古学研究』に掲載された一九六〇〜一九八〇年頃の論文を見ても、(筆者の調査が正しければ)プロセス考古学、もしくはニュー・アーケオロジ―といった言葉はまったく見つかからない。この時期に日本語でプロセス考古学に触れているように見受けられるものは、新聞記事である田中(2015 [1961])、『考古学ジャーナル』における井川(1972)、鈴木(1973)などの紹介記事や、また翻訳のあとがきで大貫(1979)が書いた簡単な紹介などである。これらの記事・紹介の年代からもわかるように、おそらくアメリカにおけるプロセス考古学の興隆については、日本の研究者も遅くとも七〇年代にはある程度意識していたと推測される(e.g. Tsuchida 1995)。しかし、田中(2015 [1961])は新聞記事という性格からか、プロセス考古学という名前に触れることなく、対岸の火車を見ているような文章でしかない。また井川(1972)や鈴木(1973)の紹介もあくまで「アメリカの動き」を紹介したものであるし、大貫(1979)もまた訳書の内容の解説であり、日本とのかかわりについてそこまで具体的に論じられているわけではない。^[4]

しかし一九八〇年代半ばになると、これも安斎(1990)が指摘するように、多くの研究者がプロセス考古学に対して、しかも批判的に言及するようになった。たとえば穴沢(1985)の論考はその最たるものであり、プロセス考古学を断罪する論文である。しかし実際のところ、多くの研究者は批判的ながらも、もう少しうまく、プロセス考古学を乗り越えよう、あるいは取り込もうとしていたように見える。たとえば横山(1985, pp. 8-9)は、プロセス考古学における「歴史」の理解が貧困であることを指摘し、歴史学としての考古学を強調する日本考古学において、目的とされる「歴史」はプロセス考古学が目指

す「プロセス」と同義であると述べる。後藤(2008)もまた、プロセス考古学の手法や理論的背景に批判的な検討を加えつつも、その成果に対して一定の評価を行い、今後の可能性を見出している。こうした記述からは、この時点で、プロセス考古学はすでに乗り越えるべきものとみなされていた可能性が推測される。それはおそらく、八〇年代半ばとなれば、後述するポストプロセス考古学の動きが無視できない時期にさしかかっていたからだろう。

もちろん、プロセス考古学がまったく好意的に扱われなかったわけでもない。実のところ民族考古学(ethnoarchaeology)というかたちで、プロセス考古学は日本考古学の中に根づいたと言えるかもしれない。民族考古学とは、ごく大雑把に言えば、民族誌のデータを参考に考古学的考察を行う分野である。たとえばビンフォードの弟子の一人であるW・A・ロングエーカーが行った、プエブロ族の土器に関する研究がよい例としてあげられるだろう(Longacre 1964, 1970; 小林・谷 1998)。この民族考古学は日本考古学の中でも一定の地位を獲得し、さまざまな研究が行われてきている(eg. 安藤 1998; 民族考古学研究会編 1998)。それはたとえば『物質文化』という、民族考古学を一つの大きな柱に据えた雑誌が存在することからも明らかだろう。

こうした民族考古学は、たしかにプロセス考古学が発展する中で登場してきたアプローチである。先述したロングエーカーの研究は「プロセス考古学の方法による土器研究の代表例の一つとみなされて」いるし(小林・谷 1998, p. 46)、後藤(2001)の序文において「民族考古学とニューアーケオロジは同一視された時期もあった」と植木も述べているように、プロセス考古学が日本考古学の中にうまく導入されたケースとして、民族考古学を挙げることが可能かもしれない。

ただ注意すべきなのは、日本考古学におけるこうした民族考古学的アプローチは、ビンフォードよりも渡辺仁という別の先駆者からの影響がより強いという点である。安斎(1983, 1998a, 1998b)が指摘するように、東京大学理学部・文学部の助教・教授であった渡辺仁は、プロセス考古学とは独立に、特にアイヌ民族のデータを用いながら、民族誌データを用いた考古学的考察を行うようになっていた。そして、現在日本考古学の中で民族考古学に携わる多くの研究者が、この渡辺仁の影響を強く受けている。赤澤威の研究などは、その早い例の一つだろう。(Akazawa 1969; 赤澤 1983)。

ここまでの議論を要約しておこう。プロセス考古学が日本考古学に導入され、また根づいたとすれば、それは民族考古学としての導入であり、一部を除けば、ビンフォードがムステイエ文化の石器で行っていたような数理的アプローチはほとんど定着せず、^[5]ヘンペル流の科学的説明の探求などといった目的はまったたく共有されなかったのである。しかし、日本で広まった民族考古学の動きは、必ずしもプロセス考古学の影響を直接受けたものではなく、むしろ渡辺仁という別のルートからの影響が強かった可能性が指摘できる。すなわち、プロセス考古学が日本考古学に与えた影響は、(少なくとも現時点で)アメリカほどに根本的なものでなかったと考えるべきだろう。

3 ポストプロセス考古学と日本考古学

ではポストプロセス考古学はどのように受け止められたのだろうか。結論から言えば、おそらくプロセス考古学よりは好意的に受け止められた一方、それでもやはり、日本考古学の中でポストプロセス考古学の主張内容が浸透しているかと言えは、やはりそうとは言いい切れない状況であると考えられる。

まずはポストプロセス考古学のごく簡単な概要から確認しておこう。しかし注意すべきなのは、第2章の対談でも触れられているとおり、ポストプロセス考古学は決して一枚岩ではないという点である。それどころか、この流れに属する研究者ごとに、その主張内容はかなりの違いがみられる。たとえば一般にポストプロセス考古学を担う研究者の一人とみなされている、マイケル・シヤンクスやクリストファー・テイリーなどは、考古学における客観的な歴史の検証・再構築といった目的に関して、その大部分を放棄してしまっているように見える (e.g. 安齋 1996; 穴沢 1988; Shanks and Tilley 1987)。もちろんこれは非常に過激なタイプの主張であり、近年のイアン・ホダーのように、より穏健なたちで、ある種の科学的アプローチと親和的なポストプロセス考古学のかたちを提案する場合もある (Hodder 2012)^[6]。実際、こうした現在の多様性もまた、ポストプロセス考古学が目指す目標の一つでもある。

このポストプロセス考古学は、名前の通り、プロセス考古学へのアンチテーゼ・批判として始まったアプローチである。プロセス考古学におけるビンフォードほどに中心的な役割を果たした研究者はいないかもしれないが、それでもやはり、イアン・ホダーという人物をその中心に据えることに大きな異論はないだろう。ホダーはもともとプロセス考古学の影響を受け、数理的なアプローチに基づく空間分析などを主な研究対象にしていたが (Hodder and Orton 1976)、こうした分析を行う中でそのアプローチの問題点に気づき始め、先述した民族考古学的調査でアメリカに赴いた経験が決定的なきっかけとなって、ポストプロセス考古学的研究を始めるようになったという (Balter 2006; Hodder 1982; 後藤 1983)。ただし、ホダーをポストプロセス考古学の中心の人物と考えたとしても、話はまだやっかいである。ホダーの主張そのものが時代ごとに徐々に変化してきているからだ。この点はビンフォードと同様である。

では一九八〇年代から現時点までの全体を通して、ポストプロセス考古学はどのような議論を展開してきたのだろうか。まず、ポストプロセス考古学では機能的観点から説明しきれない、文化のある側面が重視されてきた。それが意味であり、文脈である。現在のわれわれからすれば単なる石にしか見えないう遺物に対し、過去のある集団の人々は、神的意味合いをもたせていたかもしれない。しかし、現在のわれわれが過去の文脈を無視し、その石を現在の視点からそのまま理解しようとすれば、当然その対象は「ただの石」にしかならない。このような意味・文脈を理解するには、現在のわれわれという視点から離れなければならないが、われわれが完全に現在の視点を捨て去ることは困難であり、解釈にはどこか必ず、現在のわれわれの視点が反映されてしまう。これは時間軸だけに限った話ではなく、地域的特性もかかわってくる。実際、時代、地域、そして性別など、さまざまな要因が解釈に影響を与える。

実際、ポストプロセス考古学者は（おそらくその多くが）「現在が過去を創り出す」（Hodder 1991, p. 31; 斎藤 2004）ことを認めている。^[7]しかし問題は、過去を創り出す現在が、人によって大きく異なるかもしれない、という点である（eg. Hodder 1992）。たとえば、考古学者間であればおおよそその一致を見るかもしれないが、考古学者以外、さらには研究者以外の人であればどうなるだろうか。実際、欧米や日本の考古学者が、アフリカやオセアニア、メソアメリカなどの考古学調査・研究を行う場合、現地の人々と異なる視点で過去を理解しようとする可能性は少なくないだろう（Hodder and Hutson 2003）。

こうした理論的主張を考古学的実践に移せば、過去の理解は現在のわれわれの視点を反映したものにすぎず、客観的な理解などありえないというシヤンクスやテイリーのなアプローチもありうるだろうし、また第2章で溝口が指摘するように、データによる反証可能性を一定のかたちで保証したうえで、解釈

を行うというアプローチも可能だろう^[8]。また考古学者以外の視点という点でいえば、パブリック・アーケオロジー (public archaeology) や先住民／コミュニティ考古学 (indigenous / community-based archaeology) というアプローチも可能だろう (eg. Atalay 2012, 松田 2014)。実際、松田 (2014, pp. 2-3) が認めるように、近年注目されているパブリック・アーケオロジーには、ポストプロセス考古学の理論的主張が大きな影響を与えている。

上記のようなポストプロセス考古学が大きな影響力を持ち始めたのは、一九八〇年代半ば以降である。グーグル・スカラー (Google scholar) を調べてみれば、ビンフォードがプロセス考古学を最初に提唱した一九六二年の論文が一九九〇回引用されているのに対して、ホダーによる同様の位置付けにある一九八二年の著作も同様に一八九九回引用され (二〇一七年一〇月一日時点)、プロセス考古学と同様、各種の概説書でも必ずと言っていいほどポストプロセス考古学の項目が立てられている (eg. Johnson 2006; Trigger 2006)。このように、(もちろんん国によって多少の違いはあるとはいえ) その影響力はプロセス考古学と同様、世界的に非常に大きなものであったと考えてよいだろう。

では日本ではどうだろうか。一見、プロセス考古学よりは広く紹介され、導入されている。たとえばホダーが来日した際、それを記念する特集企画が組まれたり (慶應義塾大学民族学考古学研究室「民族考古」編集委員会 1997)、ビンフォードの場合とは異なり、ホダーの著作は邦訳されたりしている (Hodder and Othon 1976 [深沢 1987]; Hodder 1991b [深沢 1997])。またプロセス考古学が興隆した時期とは異なり、一九八〇年代以降、海外で学位をとって日本で研究を続ける研究者も徐々に増えてきた。こうした流れを見れば、日本におけるポストプロセス考古学は、プロセス考古学より恵まれた状況にあると考えられるだろ

う。

さらに、日本の大学や考古学を取り巻く現状も関係しているかもしれない。日本の考古学は大学の研究者だけでなく、県や市町村の教育委員会に所属する行政職員によって支えられてきた。こうした行政関係者からすれば、地域と考古学の関係を考えようとするパブリック・アーケオロジの動きは、ある種当然のものと受け止められるだろう。さらに、日本考古学の中でもこうした市民と考古学の関係は、非常に古くから意識されてきた。そもそも発掘作業は市民所有の土地を対象とする場合も少なくないし、遺跡の保護・保全は地域と連携して解決しなければならぬ問題である。こうした問題意識から、日本考古学でも市民・社会と考古学研究の関係は常に意識されている(岩崎・高橋2007; 考古学研究会2014; 近藤1991; 2001)。この流れは当然、社会貢献を強く求められる昨今の大学において、また別の意味で意識されるようになってきたと考えられる。しかし、こうした背景は、プロセス考古学における民族考古学の場合と同様、必ずしもポストプロセス考古学に端を発してはいない点には注意が必要である。パブリック・アーケオロジの営みを受け入れる土壌があったとしても、だからといってその背後にあるポストプロセス考古学がそのまま受け入れられているわけではない。

実際、ポストプロセス考古学も、その理論的主張がそこまで広く日本考古学の中に浸透しているとは言えない。プロセス考古学と同様、方法論に触れている概説書などを除けば、各種雑誌で発表された個別研究において、ポストプロセス考古学への直接的な言及がなされることはあまりない。結局のところ、プロセス考古学よりは好意的であるように見えるとはいえず、プロセス考古学の場合と同様、理論としてのポストプロセス考古学に対して、日本考古学はほとんど真正面から向き合っていないと考えられ

る。

4 対談…プロセス考古学とポストプロセス考古学

前節までに、理論としてのプロセス考古学とポストプロセス考古学が、日本考古学においてほとんど直視されてこなかったということを論じてきた。この点は、多くの論者が認めており、その理由を日本考古学の特徴、すなわちモノへのこだわりとそこからの帰納的推論、そして理論への忌避に求めている。

日本考古学の特徴である精密な技術をより精密にし、より精緻な帰納的推論を積み重ねることによって、この難関を突破できるであろうか。(横山 1985, p. 14)

他の科学、特に自然科学の分野では戦後たちまちにして、アメリカの強い影響を受けたが、考古学の世界は、ほとんど影響を受けていない……その方法論は、間歇的に外からの影響を受けながらも、いわば独自に発達させたものだといつてよいであろう。遺物に対する綿密な観察と、記録のための高い技術、遺跡保存への献身は、日本の考古学者の特記すべき長所でありながら、理論に対する拒否的・閉鎖的傾向もまた併せもっていると思われるのである。(金関 1985, p. 335)

「日本考古学」と「外国考古学」との二分化と日本考古学は特殊であるとの通念、そして「考古学プロバー」つまりモノの強調、こうしたことが理論考古学の進展を阻止してきた。(安斎 2004, p.

そしてこれらの著者に共通するのが、上記文面からもある程度わかるように、理論に対する閉鎖的傾向、日本考古学が日本考古学の中で閉じていることに対する、ある種の危惧、もしくは疑問である。引用した文献の年代からも明確なように、こうした危惧・疑問は今に始まったことではない。数十年も前から主張されてきた。もちろん昔に比べれば多少なりとも状況は改善されているだろうが、結局のところ、日本考古学において、こうした危惧・疑問が広く共有されているとは言いがたいか、あるいは、もしある程度共有されていたとしても、それが意識的に論じられるような機会ほとんどないように思われる。実際、大局的な視点から考古学を考える機会など、たとえば年配の研究者による記念講演や数巻にわたる概説書を編纂するような特別な機会を除けば、滅多にないのが現状だろう。

さらに、世界的に見れば、一九八〇年代から一九九〇年代にかけて大きな影響力を持ったポストプロセス考古学自体にも、かなりの批判が蓄積されてきている (e.g. 松田 2014, pp. 12-14; Bintliff 2011, pp. 8-9)。いわば世界的に、考古学はどのような姿を志向すべきかが問われているのである。そうした動きのもう一つの例として、二〇一一年に出版された『考古学理論の死』 (*The death of archaeological theory?*) という、二〇〇六年に開催された同名のシンポジウムの内容をまとめた書籍を挙げておこう。この書籍はそのタイトル通り、ここまで概観してきたプロセス考古学やポストプロセス考古学といった理論的アプローチに関して、それらが考古学にどれほどの実りをもたらしてきたのか、また今後もたらしうるのかを議論したものだ。この論考で (特に本書・本章にとって) 重要なのは、考古学理論の今後よりもむしろ、各国で各種の理論がどのように受け止められてきたのか、その現状が述べられている点である。たとえばポストプロセス考古学は本国イギリスで一定の影響力をもちつつも、結局アメリカではマイノリティでしか

ないと指摘され (Flannery and Marcus Ch. 3)、ポストプロセスだろうがプロセスだろうが、ドイツやフランスなどアングロ・サクソン系以外の国々での研究内容と乖離しすぎではないかという主張も見られる (Butler Ch. 2)。先に触れた日本の現状も、こうした世界的多様性の中で見れば、おおよそ似たような状況かもしれない。

しかしすでに述べたように、他国と異なり、日本では理論(やそれにかかわる議論)が忌避される傾向にある。プロセス考古学を批判してその問題点を明らかにしたうえで、日本考古学がプロセス考古学と距離を取っているというのであれば、その姿勢そのものには何の問題もない。問題は、プロセス考古学にしるポストプロセス考古学にしる、海外の理論的動向にどう対峙していくのか、その姿勢を明確にせぬまま、曖昧な態度をとり続けていることだろう。理論など都合よく使えるところだけ使っていればよく、そのまま理論の消費者として考古学を続けていく、という選択ももちろん不可能ではない (cf. Mizoguchi 2015)^[10]。ただその路線を自覚的に選択するか、無自覚に暗黙知として受け継いでいくか、それによっても今後の考古学のあり方は大きく変わってしまう。こうした点も含め、理論とどう対峙していくべきなのか、それをプロセス考古学とポストプロセス考古学という、考古学の中でもある意味最もわかりやすい事例に即して考えること、それが本対談と本書全体の目的である。

謝辞

本章の執筆にあたっては、科学研究費若手B「考古学理論・実践の歴史・哲学的考察に基づく人文学の哲学の基盤構築」(No.16K16885)の支援を受けた。また田村光平氏(東北大学)と溝口孝司氏からも有

益なコメントをいただいた。感謝したい。

註

- [1] プロセス考古学の概要の再構成に関しては、先ほど挙げた各種文献を参考にしている。
- [2] 科学的説明に関するヘンベルの議論については、内井(1995)などを参照。当然ながら仮説演繹法はヘンベル自身が提唱したのではなく、彼以前から定式化されてきた説明の形式である。
- [3] 翻訳がある場合は訳書の該当ページ数も挙げてあるが、訳文は筆者の責任で適宜修正してある。
- [4] ただし、ごく簡単なながら、鈴木(1973)はプロセス考古学が示唆するような、歴史に対する科学的アプローチの重要性を示唆している。
- [5] もちろん一部の例外はある。石器に関する統計的な分析としては上野(1963)、埴原・岡村(1981)などがある。しかし、これらの研究は非常に限られた例外である。また1980年代以降、日本考古学でも各種の科学的手法が取り入れられるようになってきたが、これらはプロセス考古学の影響を受けたものではない(e.g. Barnes and Okita 1998; Nakao in preparation)。
- [6] ホダー(2012)はヒトがモノに働きかけ、またモノがヒトに、そしてモノへと働きかけて、ヒトとモノどっしりが相互作用の中で進化してきた、と考えている。ホダーによれば、こうした考え方は、進化学の中で提案されているニッチ構築理論(e.g. Odling-Smee et al. 2003)と親和性が強いという。ニッチ構築理論でも、ヒトやその他の動物が、外界に働きかけて新たなニッチを構築し、そのニッチに対する適応形質を進化させてきた、という議論がなされている。ヒトの場合であれば、言語によるコミュニケーションなどがよい例だろう。
- [7] 当然ながら、過去のさまざまな歴史が現在のわれわれを創り出している、という逆のプロセスも認めている(Hodder 1991, p. 30)。
- [8] ホダーはこの立場に近く、彼は基本的に相対主義を取らなく(e.g. Hodder and Hutson 2003; Hodder 2012)。
- [9] しかし、邦訳に関しては、これはポストプロセス考古学特有の現象というわけではなく、年代が下るにつれて、日本における欧米考古学の邦訳書が増えてきたことにも後押しされているだろう(e.g. Renfrew and Bahn 2004; Trigger 2006; Renfrew 2007)。
- [10] もちろん、それでは考古学が社会的に責任ある専門分野として成立しえなくなる可能性が高く、早急に理論化の枠組みを意識的に形成しなければならぬ、というのが溝

口の立場である (Mizoguchi 2006, 対談も参照)。

参考文献

- 赤澤威 1969. 「縄文貝塚魚類の体長組成並びにその先史漁撈学的意味・縄文貝塚民の漁撈活動の復元の関する一試論」『人類学研究』77(4):154-178
- 赤澤威 1983. 『狩猟採集民の考古学：その生態学的アプローチ』東京：海鳴社
- Atalay, S. 2012. *Community-based archaeology: Research with, by, and for indigenous and local communities*. California, CA: University of California Press.
- 安斎正人 1989. 「生態人類と土俗考古：渡辺仁の学問世界」渡辺仁教授古希記念論文集刊行会『考古学と民族誌・渡辺仁教授古希記念論文集』pp. 315-333
- 安斎正人 1990. 『無文字社会の考古学』東京：六興出版
- 安斎正人 1996. 『現代考古学』東京：同成社
- 安斎正人 1998a. 『縄文式生活構造：土俗考古学からのアプローチ』東京：同成社
- 安斎正人 1998b. 『土俗考古学の先駆者たち』『民族考古学序説』pp. 4-21
- 安斎正人 2004. 『理論考古学入門』東京：柏書房
- 阿子島香 1983. 『ニッパレンジヤオリー』芹沢長介還暦記念論文集』東京：東出版堂楽社, pp. 171-197
- 阿子島香 1988. 「プロセス考古学と社会的背景」『考古学ジャーナル』296:2-6
- 穴沢味光 1985. 『考古学』としての『人類学』(1)：プロセス考古学(ニュー・オーケオロジ)とその限界』『古代文化』37(4):143-152
- 穴沢味光 1988. 「象徴考古学への懸念：M. シャンクス・C. ティリィ『考古学の再構築』をめぐって』『古代文化』40(2):1-21
- Batler, M. 2006. *The Goddess and the bull: Catalhöyük-An archaeological journey to the dawn of civilization*. California, CA: Left Coast Press.
- Barnes, G. & Okita, M. 1999. Japanese archaeology in the 1990s. *Journal of Archaeological Research*, 7(4): 349-395.
- Binford, L. R. 1962. Archaeology as anthropology. *American Antiquity*, 28(2): 217-225.
- Binford, L. R. 1965. Archaeological systematics and the study of culture process. *American Antiquity*, 31(2): 203-210.
- Binford, L. R. 1968. Archaeological perspectives. In L. R. Binford and S. R. Binford (eds.) *New perspectives in archaeology*. Chicago, IL: Aldine Transactions, pp. 5-32.
- Binliff, J. & Pearce, M. Eds. 2011. *The death of archaeological theory?* Oxford: Oxbow Press.

- Binliff, J. 2011. The death of archaeological theory? In Binliff & Pearce (2011), pp. 7-30.
- 藤本強 (編) 1976. 『日本の旧石器文化 (5) : 旧石器文化の研究法』東京: 雄山閣出版
- 藤本強. 1985. 『考古学を考える 方法論的展望と課題』東京: 雄山閣出版
- 後藤明. 1983. 『シンボリック・アーケオロジ』の射程: 1980年代の考古学の行方』『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』2: 283-309
- 後藤明. 1984. 『欧米考古学の動向: 理論と方法論の再検討を中心』『考古学雑誌』69(4): 87-137
- 後藤明. 2001. 『民族考古学』東京: 勉誠出版
- 埴原和郎・岡村道雄. 1981. 『墓に副葬された石鏃に関する統計学的検討』『人類学雑誌』89(2): 138-143
- Hempel, C. 1965. *Aspects of scientific explanation*. New York: Free Press.
- Hodder, I. 1982. *Symbols in action: Ethnoarchaeological studies of material culture*. New York: Cambridge University Press.
- Hodder, I. 1991a. Postprocessual archaeology and the current debate. In R. W. Preucel (ed.) *Processual and postprocessual archaeologies: Multiple ways of knowing the past (Center for Archaeological Investigations, Occasional Paper No. 10)*. Carbondale, IL: Board of Trustees, Southern Illinois University, pp. 30-41.
- Hodder, I. 1991b. *Reading the past: Current approaches to interpretation in archaeology (2nd edition)*. 深沢百合子訳『過去を読む: 考古学解釈のための最近の研究法 (第2版)』東京: フジインターナショナルプレス, 1997
- Hodder, I. 1992. *Theory and practice in archaeology*. New York: Routledge.
- Hodder, I. 2012. *Entangled: An archaeology of the relationships between humans and things*. New York: Wiley-Blackwell.
- Hodder, I. and Hutson, S. 2003. *Reading the past: Current approaches to interpretation in archaeology (3rd edition)*. New York: Cambridge University Press.
- Hodder, I. and Orton, C. 1976. *Spatial analysis in archaeology*. Cambridge University Press. 深澤百合子訳『考古学における空間分析』東京: フジインターナショナルプレス, 1987
- 井川史子. 1972. 『1971年の動向 (10) 欧米』『考古学ジャーナル』68: 66-71
- Ikawa-Smith, F. 1982. Co-traditions in Japanese Archaeology. *World Archaeology*, 13(3) 296-309.
- 岩崎卓也・高橋龍三郎 (編) 2007. 『現代社会の考古学: 現

代の考古学(一)』東京：朝倉書店

Johnson, M. 2006. *Archaeological theory: An introduction* (2nd edition). New York: Wiley-Blackwell.

金閔恕. 1985. 「世界の考古学と日本の考古学」近藤義郎・横山浩一・甘粕健一・加藤晋平・佐原真・田中琢・戸沢充則(編)『日本考古学(1)：研究法』pp. 301-343. 東京：岩波書店

慶應義塾大学民族学考古学研究室「民族考古」編集委員会. 1997. 『別冊特集号：ポストプロセス考古学の射程：ホダ―理論に対する実践的リフライの試み』

考古学研究会(編) 2014. 『考古学研究会60周年記念誌：考古学研究60の論壇』岡山：考古学研究会

小林正史・谷正和. 1998. 「ロンクエーカーの民族考古学的研究」民族学考古学研究会編『民族考古学序説』pp. 45-54. 東京：同成社

近藤義郎(編) 1991. 『岩波講座 日本考古学(7)：現代と考古学』東京：岩波書店

近藤義郎. 2001. 『日本考古学研究序説』東京：岩波書店
Longacre, W. A. 1964. *Archaeology as anthropology: A case study*. *Science*, 144 (3625): 1454-1455.

Longacre, W. A. 1970. *Archaeology as anthropology: A case study*. Tucson: University of Arizona Press.

松田陽. 2014. 『実験パブリックアーケオロジ―：遺跡発掘

と地域社会』東京：同成社

溝口孝司. 1991. 「社会考古学の射程：社会システムの変容における外部／内部の問題にふれつつ」『地方史研究』41(4): 4-15

溝口孝司. 1997a. 「考古学的研究の基本構造に関する一試論：欧米考古学を主要な素材としての分析と提言」『考古学研究』44(1): 51-71

溝口孝司. 1997b. 「ポストプロセス考古学の見取図：社会考古学的視座から」『民族考古』別冊特集号：5-15

Mizoguchi, K. 2006. *Archaeology, society and identity in modern Japan*. Cambridge: Cambridge University Press.

Mizoguchi, K. 2015. A future of archaeology. *Antiquity*, 89(343): 12-22.

民族学考古学研究会編. 1998. 『民族考古学序説』東京：同成社
Nakao, H. 2018. A quantitative history of Japanese archaeology and natural science. *Japanese Journal of Archaeology*, 6(1): 1-20.

O'Brien, M. J., Lyman, R. L., & Schiffer, M. B. 2005. *Archaeology as a process: Processualism and its progeny*. Salt Lake City, UT: University of Utah Press.

Odling-Smee, F. J., Laland, K. N. and Feldman, M. W. 2003. *Niche construction: The neglected process in evolution*. Princeton, NJ: Princeton University Press. 佐倉統・山下

- 篤子・徳永幸彦訳『ニッチ構築…忘れられていた進化過程』東京：共立出版、2007
- 大貫良夫、1979. 「あじかき」大貫良夫訳『文明の誕生』pp. 339-345. 東京：岩波現代選書 (Renfrew (1973) の翻訳)
- Renfrew, C. 1973. *Before civilization: The radiocarbon revolution and prehistoric Europe*. London: Jonathan Cape Ltd.
- Renfrew, C. 2007. *Prehistory: The making of the human mind*. London: Orion. 小林朋則訳『先史時代と心の進化』東京：武田ラングトハウスマジヤン、2008
- Renfrew, C. and Bahn, P. 2004. *Archaeology: Theories, methods, and practice. (4th edition)*. New York: Thames and Hudson. 池田裕・常木晃・三宅裕監修『考古学：理論・方法・実践』東京：東洋書林、2007
- Salmon, M. 1982. *Philosophy and archaeology*. New York: Academic Press.
- 佐々木憲一、1990. 「アメリカ考古学と日本考古学：その協調の可能性」『考古学研究』37(3): 25-44
- Shanks, M. and Tilley, C. 1987. *Re-constructing archaeology: Theory and practice*. New York: Cambridge University Press.
- 鈴木公雄、1973. 「New Archaeology 素描：アメリカ・エール大学に留学して」『考古学ジャーナル』77: 5-8
- 田中琢、2015 [1966]. 「アメリカ考古学への一視点」『考古学で現代を見る』pp. 56-57. 『朝日新聞』一九六六年九月七日
- Trigger, B. G. 2006. *A history of archaeological thought (2nd edition)*. New York: Cambridge University Press. 上垣田志訳『考古学的思考の歴史』東京：同成社、2015
- 都出比呂志、1986. 「日本考古学と社会」近藤義郎、横山浩一・甘粕健一・加藤晋平・佐原真・田中琢・戸沢充則(編)『日本考古学(7)：現代と考古学』pp. 31-70. 東京：岩波書店
- Tsude, H. 1995. Archaeological theory in Japan. In P. Ucko (ed.) *Theory in archaeology: A world perspective* (pp. 292-304). New York: Routledge.
- 植木武、2001. 「編者コメント」後藤明『民族考古学』, p. 1
- 上野佳也、1963. 「東日本縄文文化石鏝の大まなびについて比較研究」『考古学雑誌』49(2): 107-120
- 内井惣七、1995. 『科学哲学入門：科学の方法・科学の目的』京都：世界思想社
- 渡辺仁教授古稀記念論文集刊行会(編) 1989. 『考古学と民族誌：渡辺仁教授古稀記念論文集』東京：六興出版
- Wiley, G. R. & Sabloff, J. A. 1993. *A history of American archaeology (3rd edition)*. New York: W. H. Freeman & Co. 小谷凱宣訳『アメリカ考古学史』東京：学生社、1979

Wylie, A. 2002. *Thinking from things: Essays in the philosophy of archaeology*. Berkeley, CA: University of California Press.

横山浩一・1985。「総論：日本考古学の特質」近藤義郎・横山浩一・甘粕健一・加藤晋平・佐原真・田中琢・戸沢充則（編）『日本考古学（1）：研究法』pp. 1-15. 東京：岩波書店

あとがき

田村光平・有松唯

考古学は過去の世界、社会、人の営み全般を復元する。遠い過去の出来事なので、直接の観察も、当事者へのインタビューもできない。関連する現象を観る視座と、検証可能な私たちでの論理的復元の方法論が求められる。プロセス考古学とポストプロセス考古学は、その両面において、ともに一大潮流を成してきた。考古学の精度と範疇を更新する試みであり、考古学という学問領域を抜本的に革新する思考の体系だったからだ。しかし、日本国内では、個々への理解も相互の違いも、ひいてはこの革新性も長らく認識されてこなかった。知る専門家は一定数いたにもかかわらず、そして何より重要なことに、それぞれの体系を第一人者から直に習得した日本人研究者がいるにもかかわらず。

「突如として二人の対話が企画され実現したことに率直な驚きと疑問を抱いた」(第3章、126頁)という大西の所感は、多くの読者・関係者が共有するところかもしれない。内幕をさらせば、本対話の企画と実現は、主催者一同のシンプルな動機に基づいて実施された。すなわち、プロセス考古学とポストプロセス考古学の国内第一人者どうしの対話を一度この目で見てみたいという、動機というよりも欲求と称すべきような思いが第一にあった。他のどなたかが実施してくださるといっているのであれば、嬉々とし

て聴衆となるのみであったが、その気配もなければ、前例すらない。それはなぜかを問う前に、誰も実現させてくれそうもないので自分たちで実現させるしかないと踏み切った結果が、この対話であり、本書である。

こうした経緯であったため、主催者一同、「なぜ今」という問いかけ、そして「なぜこれまで実現されなかったのか」ということに対して、確固たる考えや信念を申し上げられる立場にはない。代わって、本書中で、何人かが言及をしてくれている。そこからうかがえるのは、これまでこうした対話が実現しなかったこと自体が、プロセス考古学、ポストプロセス考古学双方の、考古学という学問体系の中の位置付けが、日本国内で適切に理解されていないこと、そしておそらくこのことは、日本における考古学のありようの何かしらを反映しているのではないかということである。何かしらが何であるのかは、本書の中でもたびたび触れられているため、ここでは指摘するに留めておこう。

本書では、プロセス考古学とポストプロセス考古学のいわば学史的な位置付けを中心に扱ってきた。一方で、両者はその後さまさまな派生形を生み出している。ここではその派生形を少し取り上げておこう。まずは、プロセス考古学の影響を受けて成立した研究プログラムとしての、進化考古学（ダーウィン考古学）である（*e.g.*, Shennan 2012）。プロセス考古学の後継とはいえ、進化考古学には、本書で多くとりあげられているルイス・ペンフォードよりも、デビッド・クラークからの思想的影響が色濃い（*e.g.*, Lycett and Shennan 2018）。

進化考古学は、ダーウィンの進化的理論を文化現象へより「直接的に」当てはめる。文化の情報システムとしての側面を強調し、文化の変化を、「変化を伴う由来」という継承プロセスの帰結として考える。

こうした文化の捉え方は、一九七〇年代後半、人類学者や遺伝学者によって定式化され、「文化進化」とよばれている (Cavalli-Sforza and Feldman 1981; Boyd and Richerson 1985)。本書で阿子島や大西が紹介した文化進化論とは、系譜的にも内容的にも異なっていることに注意されたい。本書の執筆者のひとりでもある井原は、これを、「現代的な文化進化研究」とよんでいる (井原 2017)。つまり、進化考古学は、「現代的な文化進化研究」を概念整理の核に据える。「現代的な文化進化研究」は、さまざまな文化伝達過程の数理モデルを構築し、文化伝達プロセスの違いが文化の変化パターンに及ぼす影響を検討してきた。進化考古学は、数理モデルに用いることで、データからのパターンの要約のみならず、プロセスの推定まで一貫した枠組の中で行っている。こうしたアプローチにより、数理モデルで仮定を明示するとともに、複数の対立する仮説の妥当性を量的に比較することも可能になる (井原 2017; 田村 2017)。

また、技術的發展による数理的手法の導入例として、三次元計測と幾何学的形態測定学についても触れておこう。近年、三次元計測が普及する一方で、データの解析方法が課題の一つとなった。その中で注目されている手法が幾何学的形態測定学である。もともとは生物の形態を分析する手法だが、考古学データへの応用が増えつつある (田村ほか 2017; 田村・松本 2017)。この手法により、個々の遺物の形態の類似度を量的に比較できる。幾何学的形態測定学そのものは、パターン認識の手法である。つまり、パターン認識としての幾何学的形態測定学それ自体は、ミドルレンジ・セオリーの代替にはなりえない。観察しているパターンを生み出したプロセスの特定は、今後、今以上に議論されるようになるだろう。数理モデルや定量的なデータ解析が、プロセス考古学と親和的であったということは、歴史的には正しいだろう。しかし、ポストプロセス考古学が、このような手法と(原理的に)相容れないかといえ

そうともいえない。たとえば、溝口は、社会学のネットワーク分析を援用し、古墳時代の集団間の関係性を定量的に分析している (Mizoguchi 2009)。対談中で、溝口と阿子島の両者に共通していたスタンスの一つは、パターンの認識とプロセスの推定（あるいは解釈）の分離である。であれば、定量的解析とプロセスの発想・研究のゴールは、必ずしも相容れないものではない。パターン認識の方法が多様であれば、多様な情報をデータから汲み出し、多角的な視点からの分析が可能になる。上述した三次元計測も、資料が持つ情報をできるかぎり残してデータ化する試みの一環である。最終的には、これらで以上に多くの人間が、上質なデータにふれることで、多様な視点から多様な解釈を生むことにつながるはずである。結局、一口に数理的・定量的解析といっても、その役割は、研究プログラムやコミュニケーションごとにさまざまである (eg. Mithen 1994)。数理的・定量的解析について有益な議論を行うには、こうした多様性を考慮することが必要だろう。

ポストプロセス考古学が拓いた物質文化研究についても、新たな地平が深化されている。物質文化の象徴的側面への着目は、ポストプロセス考古学が提起した視座である。ここでは、その中で、マテリアリティについて取り上げよう。物質の存在の仕方は社会や文化ごとに異なる。その意味で、物質は社会的な存在である。固有の意味に満ちた物質とのかかわりの中で社会が解釈され、存在する。こうしたマテリアリティ論の視点に立てば、人間と物質とのかかわり方の中で物質の意味を解釈することなしに、物質文化を通して過去の社会を理解することは不可能である。遺物の型式や交易圏自体に普遍的な意味はない。もしかたなく同じ素材・形状の遺物、そして同様の交易圏があったとしても、当時のコンテキストが異なれば意味内容は変わる。過去の人々が物質文化とかかわる中、そして物質を介して他者とか

かわる中で、型式や交易圏をどのように認識し、意味を見出したのかを解釈しなければ、適切な理解はできない。過去の人々が物質といかにかかわり合ったのか、物質をどのように認識していたのか、同時に、人間関係を規定あるいは醸成するものとしての物質の機能も研究の対象となっている。近年ではこうした見方を拡大し、もっぱら人に属すると考えられていた行為主体性（エージェント）を物質にも想定していく試みもなされるようになっていく（Olson 2010）。

こうした視点は、過去社会における人々の認知やコミュニケーション、そして、個人とその日々の実践への着目を促した。そこでの個人は、意思と想像力を持ち、社会や文化、環境を変化させる行為の主体として現れる。社会は、先天的な構造としてあるのではない。個々人が他者との関係を、さまざまな物質を交えた実践を経て経験し、そのコンテキストを構成する人や物質との関連の中で理解すること構築される。

物質、人、社会へのこうした見方は、過去社会に対する動的で、柔軟な研究視点をもたらした。それは、社会構造から個人レベルの活動へと、マクロからミクロへという照準の変化と捉えられがちであった。実際は、社会を再生産し、変化させる主体的な存在としての個人を過去社会にも見出し、ひいては、社会や文化の流動性を前提として、過去の事象を捉える視座を浮かび上がらせている。

この視座に則れば、普遍性や共通項よりも、地域ごとの文脈や、相違への着目が重要となる。かつ、社会のリーダーを中心に据えた、トップダウンの社会変化観を脱却し、名もなき個々人の、日常生活こそが、社会構造の構築と変革を左右する。従来の考古学で自明とされてきた視点を転換し、これまで看過されてきた側面への視点が確立されつつある。

考古学データから、こうした個々人のミクロレベルの活動や認知レベルにアプローチすることの方法論的限界は、いまだに払拭しきれてはいない。とはいえ、今では、民族学や人類学、社会学の知見やデータを組み合わせた分析手法はすでに定石となっている（有松 2010）。認知心理や脳科学分野の知見との統合も早晚普及していくことになるだろう（*eg.* Renfrew, Frith and Malafouris 2009）。考古学が過去の人間活動のあらゆる側面を復元し説明する学問分野である以上、人に関するあらゆる分野の知見を統合していくことは必然である。そして、多様な知見との統合をしようよう、考古学自身が他分野と歩調を合わせて変容していくことも、また必然である。今後は、考古資料の測定、分類、分布範囲の抽出などにおいて、諸分野の知見と統合しよううなかたちでのデータ化、そしてよりミクロなレベルでの精緻な分析が前提となる。多様なデータを複合した重層的・多角的な解析が必要となる中で、上述した数理的手法は、こうした文脈でも、いつその必要性をもって求められるようになっていくだろう。

他分野の変化に伴って、考古学も変化しなければならない。プロセス考古学とポストプロセス考古学はそのことを鮮やかに体現し、考古学を大局的に押し上げた。その功績のうえで考古学に携わる研究者の責務は、ただ単に双方の思考を受け継ぎ実践することではなく、さらなる革新を探索し、実現させ、考古学を変化させ続けていくことである。そして現に、上記のように、さまざまな試みがなされている。世界の見方は多様になり、考古学の範疇は拡大し続け、方法は日々刷新されている。自身の取り組みを研究と称するのであれば、多様なアプローチの中で自分の思考と方法の位置を認識できなければならぬし、刷新の速度に足並みを揃えられなければならないし、何より、知の蓄積に貢献できなければならない。読者の多数を占めるであろう、日本で考古学やその関連分野に携わる専門家にとって、本書が

その一助となれば幸いである。

参考文献

- 有松唯 2015. 『帝国の基層——西アジア領域国家形成過程の人類集団』仙台：東北大学出版会
- Boyd, R. and Richerson, P. J. 1985. *Culture and the evolutionary process*. Chicago: University of Chicago Press.
- Cavalli-Sforza, L. L. and Feldman, M. W. 1981. *Cultural transmission and evolution: A quantitative approach*. Princeton: Princeton University Press.
- Shennan, S. 2012. Darwinian cultural evolution. In: I. Hodder (ed.) *Archaeological theory today 2nd edition*. Cambridge: Polity Press, pp. 15-36.
- 井原泰雄 2017. 「現代的な文化進化の理論」中尾央・松木武彦・三中信宏(編)『文化進化の考古学』pp. 1-34
- Lycett, S. J., and Shennan, S. J. 2018. David Clarke's Analytical Archaeology at 50. *World Archaeology*, 1-11.
- Mithen, S. 1994. Simulating prehistoric hunter-gatherer societies. In: N. Gilbert and J. Doran (eds.) *Simulating societies: The computer simulation of social phenomena*. London: Routledge, pp. 165-193.
- Mizoguchi, K. 2009. Nodes and edges: A network approach to hierarchisation and state formation in Japan. *Journal of Anthropological Archaeology* 28(1): 14-26.
- Olsen, B. 2010. *In defense of things: Archaeology and the ontology of objects*. New York: Altamir Press.
- Renfrew, C., Frith, C., and Malafouris, L. Eds. 2009. *The sapient mind: Archaeology meets neuroscience*. New York: Oxford University Press.
- 田村光平・有松唯・山口雄治・松本直子 2017. 「遠賀川式土器の楕円フーリエ解析」中尾央・松木武彦・三中信宏(編)『文化進化の考古学』pp. 35-62
- 田村光平・松木武彦 2017. 「幾何学的形態測定学による前方後円墳の墳丘形態の定量的解析」中尾央・松木武彦・三中信宏(編)『文化進化の考古学』pp. 63-88
- 田村光平 2017. 「文化進化研究の展開：過去と現在、考古遺物と実験室をつなぐ」『現代思想』(特集)変貌する人類史) 2017(6). pp. 205-217. 東京：青土社